
円卓無双

康頼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

円卓無双

【コード】

N0966BA

【作者名】

康頼

【あらすじ】

終焉の地を訪れた円卓最強の騎士ランスロット。

自らの行いの果ての結末を見て彼は何を思う。

prologue

そこは地獄のような風景だった。

ほんの数日まで、野花で溢れかえっていたキヤムランの丘は血という赤い絨毯に覆われ、白銀の鎧を纏う残骸からは死臭が漂い始めていた。

何故、このようなことに……

目の前の惨劇に吐き気を催しながら、ゆっくりと丘の頂きへと歩き始める。

鉄の匂いが鼻に充満し、時々血だまりに足を取られそうになるが、それでも歩き続けた。

足が取られ、思わず足元を覗いてみるとそこには同僚だった騎士の亡き骸あった。

彼は、頭を裂かれた傷で絶命しており、その姿は誇りある騎士そのものだった。

それに比べて自分の無様さには笑うしかない。

いや、そもそも私には笑う資格など無いのだ。

私が親友であり好敵手でもあった『太陽の騎士』ガウエインを打ち取らなければこんなことにはならなかっただろう。

私が誇りに思い忠義を誓った王に手傷を負わさなければ、王は死ぬことはなかっただろう。

私が裏切りなどしなければこのような結末は迎えなかっただろう。

私がいなければ、彼女が悲しむことはなかっただろう。

屍の道を踏み越えて、丘の頂きに辿りつく。

ここがこの戦いの終着点、王とその息子が死闘を演じた場所である。

足元には、絶望に歪んだ表情で朽ちた男の姿だった。

この男に抱く感情は複雑だ。

この男とアグラヴェインの企みにより、私の不義が暴露された。

そのことに関して怒りを感じてしまうことがあったが、今となっては憐れでしかない。

王を裏切ったことに関しても、私だけは批判をすることができない。

一人の結末を確認した足は再び丘を下り始めて、もう一つの結末を確認に向かう。

馬の背に跨り、最後にもう一度だけ丘の方に視線を向ける。

これが自らの罪だ。

背負うべき罪を目に焼き付けて、馬を走らせていく。

駆け抜ける自分の周りには誰もいない。

常に我々の先頭を走り続けた王も、隣で豪快に笑うガウエインも、その姿を見て静かに笑みを零すトリスタンも、自分とガウエインの後を追うことに必死だったガレスとガヘリスも、その光景を見て頬を釣り上げるケイも…

全てこの世界からいなくなってしまうた。

木々の隙間を縫うように走らせて向かった先は子供の頃、よく駆け回った森である。

ここが終焉の場所である。

馬から飛び降り、ゆっくりと歩き出す。

見慣れた懐かしい景色を見て思いだすのは幼少期、誇り高き騎士に憧れて腕を磨き続けた自分の姿である。

湖の精、ヴィヴィアンの元で完璧なる騎士に育てられた私は、今では全てを裏切った不義の騎士である。

懐かしい記憶に囚われつつも、歩みは何か guidance されるように進み、そして辿りついた。

樹齢数百年の大樹の幹の傍に、小さく土が盛られた傍に剣が突き刺さっていた。

それだけで、理解した。

ここが王が終焉した場所なのだ。

気付いた時には自分は両膝をつき、涙を流していた。

認めたくなかった。

私とは違い、完璧だった王が死んでしまったということに。

共に戦場を駆け抜けることができないことに。

.....

どれほどの時間が経っただろうか、背後に気配を感じ、思わず振り返る。

そこには憤怒の表情を貼り付けた忠義の騎士がいた。隻腕から繰り出される槍捌きに、思わず身体は反応し、側面に飛び転がりながらも、愛剣アロンダイトに手を掛ける。

「ベデイヴィア……」

「裏切り者の貴方が何の用です」

氷河のような冷たい殺意に、背筋を凍らせる。

彼が私に殺意を向けるのは当たり前だった。

私の裏切りから祖国は分かれ、戦いが起こり、多くの騎士と、同僚の円卓の騎士を失ったのだから。

茫然と彼を見るしかなかった私を見て、ベデイヴィアの表情は怒りを露わす。

「何故、剣を抜かないのです？ それとも私ごとき相手をするのに剣はいらないと？」

流星は円卓の騎士筆頭です。と吐き捨てるベデイヴィアに対し、私は剣を抜くことはできない。

私はもう仲間を斬りたくないのだ。

ガレスとガヘリス、ガウエインを殺めて、王に致命傷を与えた感触を思い出すと吐き気と悲しみしか思いたさなない。

だが抜かなければ間違い無く私は死ぬだろう。

確かに私と刃を交えて互角に戦えたのは、王とガウエインとトリスタンくらいである。

しかし、それは目の前にいるベディヴィアが弱いというわけではない。

戦場を共にかけた時に見せた彼の槍捌きは、驚嘆に値するもので、疾さでは円卓の騎士随一かもしれない。

「ならその飾りを抜いて差し上げましょう」

獣のような荒々しさから放たれた精錬された刺突の数は、六。

人の身で回避できるものではない。

横に逃げるように跳び、回避できない突きは左手で受け止める。

鋼でできた籠手を貫き、血肉を切り裂いた突きを右手で掴む。

そのまま奪い取ろうと右手に力を加えるが、距離を詰めていたベディヴィアの蹴りにより阻止された。

「甘い」

「ぐっ」

瞬時に槍を離し、ベディヴィアの蹴りを受け止めると、そのまま後方に飛ぶ。

そのまま宙に浮いた私に向かって、ベディヴィア右手に持った槍を矢のように投げ飛ばす。

飛来する槍に対し、私ができることはアロンドイトを抜くことだけ

だった。

鞘から刃を抜き去ると同時に、槍を弾き返すと刃先をベデイヴィアに向ける。

ベデイヴィアは弾き返された槍を受け止めると、感触を確かめるように握り返す。

「流石ですね。 王が認めたことはあります」

称賛の言葉に込められた憎しみを受け止めた私は、刃先を地面に向ける。

「やめようベデイヴィア」

力無く吐き出した私の一言にベデイヴィアは呆気に取られたような表情を浮かべ・・・小さな声で笑い始める。

「王の御前だからですか？ ふん、笑わせてくれますね。裏切り者の貴方が」

その言葉に私は肯定するかのように頷き返す。
するとベデイヴィアは、面白くなさそうに鼻を鳴らすと、槍を構える。

「なら、私は王に最後の手向けとして貴方の首を差し出す。それが騎士の務めだ」

仇討ち。

それは主を討たれた騎士にとって当たり前のことである。

なら私ができることは一つだ。

この首を差し出そう。

剣を収めた私にベディヴィアは吠える。

「なら、そのまま死ねっ！！！！」

一直線に私の心臓に向かう刺突を、私は受け入れるように眺める。
これが私にできる最後の忠義の表し方だ、と。

そんな自分を思わず笑ってしまう。

心残りと言えば、王自らの手で討たれたかった。

そう考えた私の目の前が光に包まれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0966ba/>

円卓無双

2012年1月2日03時52分発行